

# ライフセービングスポーツの技術習得に関わる競技経験とは？

## —スポーツトランスファーがもたらす転移の解明—

科学コミュニケーションゼミナール 1316070 渡邊 剛也

### 1. 研究動機・研究目的

ライフセービングの活動には2つあり、1つは水辺の事故をなくすことを目的とした海水浴場やプールでの監視・救助活動である。2017年時点では全国195か所の海水浴場にライフセーバーを派遣している。もう1つは実際のレスキューを想定した技術を競うライフセービングスポーツである。ライフセービングスポーツは第2のオリンピックと呼ばれているワールドゲームズの正式種目に採用されており、世界的な認知度は高いスポーツである。世界大会も2年に1度開催されており、日本代表選手を派遣している。日本ライフセービング協会の会員を年齢ごとに分けた比率では10代と20代で65%に達しており、若い世代が非常に多いことがわかる。さらに、現在43団体ある学校クラブのうち高校のクラブは3団体で残りの40団体は大学のクラブである。このことから、大学生になってからライフセービング活動を始めの人がほとんどである。また、大学生ライフセーバーを対象とした先行研究は91.8%の大学生ライフセーバーがライフセービング活動を始め以前に何らかのスポーツを経験していることを報告している。さらに、指導者に恵まれているという項目で「全くそう思わない」「あまりそう思わない」に39.4%が回答している。本大学においてもライフセービングスポーツの指導者がおらず、学生が学生を教える状況である。このような現状から過去の競技経験をライフセービングスポーツに活かした効率の良い指導法が求められている。ライフセービングに関する先行研究では、ライフセービング競技の生理学的特徴についての研究がなされてきた。しかしながらライフセービングを対象とした研究でライフセービングスポーツに関する転移の研究は未だ十分に展開されていない。さらに、転移の研究において競技者自身の主観的な視点からの分析も十分に展開されていない。そこで本研究では過去の競技経験がライフセービングスポーツに転移した事例を収集し、過去の競技経験が技術習得に与える影響を明らかにすることを目的とした。

### 2. 研究方法

本研究の対象者は順天堂大学ライフセービング部の部員6名（男性3名、女性3名、）とした。2019年11月に質問紙による5分程度のアンケート調査を行った。参加者には質問紙の回答および提出をもって同意とする旨を伝えてから提出させた。その後、半構造化面接法によるインタビュー調査を行った。インタビューは30分程度とした。インタビューの対象種目は2019年の全日本ライフセービング選手権予選においてエントリー数の多かった上位2種目（ボードレース、ビーチフラッグス）を対象とした。経験を積んだ習熟度の高い種目にのみ回答させるために参加者は対象2種目のうち全日本ライフセービング選手権大会に出場した種目について回答した。音声データは参加者の承諾を得た上でスマートフォンアプリの録音機能で記録した。インタビューではありのままのエピソードを語ってもらうた

めに、回答の誘導（バイアス質問）に配慮し、先行研究の情報提示や過剰な記憶の喚起は行わなかった。

### 3. 主な結果と考察

参加者 6 名のインタビューから 39 のエピソードを収集した。ボードレースについては 3 名が回答し、ビーチフラッグスについては 4 名が回答した。正の転移に関するものは 24 エピソードあった。そのうち、9 のエピソードがボードレースに関するもので、15 のエピソードがビーチフラッグスに関するものであった。負の転移に関するものは 15 エピソードあった。6 のエピソードがボードレースに関するもので、9 のエピソードがビーチフラッグスに関するものであった。転移内容の項目をボードレースではレース技術とパドリング技術に分類し、ビーチフラッグスではレース技術と起き上がり技術、ラン技術に分類した。分類できなかったものは不明とした。ボードレースに関して、水泳からは平泳ぎやバタフライといった泳ぎの技術からパドリング技術への転移に関するエピソードが得られた。逆に野球からはスタート時やボードレース中盤にあるブイ回りといったレース技術に関するエピソードが得られた。ビーチフラッグスに関しては陸上の 100m やハードルといった短距離種目の走り方が特に起き上がり直後のランに活かされたというエピソードが得られた。ボードレースの 6 のエピソードのうち、4 つがパドリング技術に関する内容で、回答した 3 名全員からエピソードが収集された。ビーチフラッグスは 9 のエピソードのうち、6 つがラン技術に関する内容だった。元々の母指球で地面をつかむ走り方が砂浜でのつま先からつく走り合わなかったというエピソードが陸上から得られた。走り方のエピソードは野球からも得られた。バレーとバドミントンといったネット競技からは、野球と陸上の正の転移のエピソードで挙がっていた起き上がり直後のランへの対応がうまくいかないということだった。

### 4. 結論

水泳はボードレースのパドリング技術の習得に大きく寄与している可能性が高い。そして、砂浜での走り方と平地の走り方は違う。そのため、陸上経験者のような平地での走り慣れている人は、習得する際に以前の走り方の癖を修正しなければならない問題が発生する。

### 5. 卒業論文の執筆を終えて

はじめに、本研究に協力してくださった皆様に心から感謝の意を示したい。本研究はまだまだ認知度の低いマイナースポーツであるライフセービングスポーツの発展に貢献したいという思いから執筆した。本研究ではライフセービングスポーツの技術習得に関わる過去の競技経験の転移を明らかにするための記述研究である。そのため、語られた転移エピソードが実際に技術を習得する際にどの程度関連しているかは未検証である。また、今回は 2 種目を対象としたが、ライフセービングスポーツは 2019 年度の全日本ライフセービング選手権大会に採用されている種目で 11 種目ある。この先、ライフセービングスポーツの研究を展開していく中で本研究では対象とすることのできなかった種目についても研究を展開していく必要がある。終わりに、この論文からライフセービングへの転移に関する研究が進んでいくことを願っている。